

科目：国際化（平成20年度 1-B）

演題：『鳥取県が目指すこれからの国際化とは』

講師：鳥取県知事 平井 伸治 氏

平成20年5月24日 米子コンベンションセンター

## 姉妹都市交流と平和

だんだん世の中も変わり、地球はすごく小さくなっています。その中で鳥取県はどちらかというと無縁だと思われるかもしれませんが、実はいろんなところで外国との接点が見えています。

私は、副知事を辞した後、国に帰っていたんですが、さらにアメリカのニューヨークにある自治体国際化協会という機関に出向して、日本の自治体の国際交流のお手伝いをしていたんです。米子市だったら韓国の東草市や中国河北省の保定市、境港市なら中国の琿春市というように姉妹都市がありますね。こういう都市交流の縁組のお手伝いが一つの仕事でした。皆さんは、「国際交流」というとどんなイメージを持たれますか。ニューヨークにいた頃、私は、その原点にぶつかったような出来事がありました。

平成18年7月、アメリカのワシントン.D.Cで国際姉妹都市連盟50周年の大会があったんです。今から50年前、アイゼンハワー大統領が、「これからは世界平和のために姉妹都市の運動をやろうではないか。」と呼びかけ、姉妹都市の取り組みが始まりました。当時、日本は戦後の余韻の中から高度成長へ向けて少しずつ歩みを強めていた頃です。1955年12月7日、ミネソタ州セントポール市と長崎市、これが第1号でした。12月7日という日付、これは真珠湾攻撃の日（現地時間）です。大戦中、アメリカ中がこぞって、「リメンバー・パールハーバー！」と誓ったその日に縁組みをしたんです。しかも、相手は原爆が落とされた長崎市。場所は平和公園だったと伺っています。

やはり、国際的な姉妹都市交流を行うことについては、「同じ過ちを繰り返してはならない」という強い決意があったんですね。式典で配布された記念誌には、「我々は何のために国際交流をやるのか。愚かにも我々は時として戦火を交え多くの命や財産を失う。だからこそ、市民レベルで地域と地域、人と人が出会って理解し合い、愚かな戦争をなくそう。」という考えからこの運動が始まったのだ、と記してありました。ですから、アメリカと姉妹都市の縁組みが多かった国は他ならぬ日本でありドイツだったんですね。そういう歴史があります。

その大会の2日目。中東の平和をテーマとしたシンポジウムがあり、パレスチナやイスラエルの市長たちがシンポジストの予定になっていました。ところが、その前日、イスラエルがレバノンにミサイルを撃ち込んだニュースが世界を駆けめぐりました。私はこんな時にパレスチナとイスラエルの人たちが壇上で話し合うなんてできないと思いました。ところが翌日、会議は予定どおり始まったのです。そして、その言葉には決然たる空気を感じます。“もう我々は戦争に辟易している。政治家はすぐに暴力に訴えるが、被害を受けるのはいつも市民。国同士がばかげた争いをしても、我々は絶対にその友好を遂げるために姉妹都市交流を続けよう。”一人が演説するたびにスタンディング・オベーションで、本当に興奮しました。ややもすると、私たちは、国籍にこだわり、アメリカ人だ、中国人だと判断します。我々は同じ地球上の人類として、お互いかけがえのない家族やふるさとはあるわけです。それを守り育てていく方法とし

て、国際交流があるのだということ、初めて実感した気がしました。

## 経済的な国際化

友好交流よりもっと進んでいるのは、経済的な交流です。東アジアは既に経済では一つになっていますし、私たちの周りに外国人が住んでいるという地域も確実に増えています。多文化共生。様々な文化が共存する、そういう社会になってきています。このように、地域社会も国際化の波を一身に受けていて、私たちはどう捉えてつくり変えていかなければならないのか、ということになってくるわけです。

今まで日本は島国ですから、他の国にあまり影響されなかった。だから、独自の文化を育てることができたし、豊かさもそれなりに享受できたわけです。しかし、第二次世界大戦後、高度成長が始まって、日本は「世界の工場」として加工貿易で富を築いてきました。そのころから外国との縁は切っても切れなくなります。今はさらに国際的な分業が進み、海外との競争も激しくなっています。お互いに人や物を往来させることで私たちの経済や社会が成り立っている。この流れは誰にも止められない。今さら鎖国を宣言できないのです。

今、鳥取県でも随分と海外と結び付いて仕事をしている企業があります。例えば、王子製紙さん。日野川の豊かな水も要因ですが、原料や物資の輸送は外国とは切っても切れないからこそ境港の近くに立地しているのです。大企業だけではありません。先般、鳥取県の特産品や水産品などを海外に紹介し、ビジネスチャンスに変ようと中国の上海に行ってきました。すると、上海の高級マーケットで米子の丸京製菓さんがどら焼きを販売しておられました。また、ニューヨークでは、以外と日本の酒がいろいろと入ってくるのですが、鳥取県中部のお酒がとて評判がいいという話も耳にしたことがあります。

日本料理は外国で人気が高いですが、一緒に清酒をぐいっと飲むのがいい。だから、日本レストランで高級な日本酒が流通しているんです。そんなチャンスもあるんです。

また製造業ではこの大山のふもとにシャープ米子さんがあります。この工場では中小型の液晶パネルを作りますが、製造工程で欠かせないのは中国上海の工場との繋がり。鳥取の三洋エプソンさんも蘇州と結び付いて生産しています。ある製造工程までは国内でやり、その先は海外で行うといった組み合わせなんです。大山町のマッサージチェアのファミリーさんも主たる生産工場は上海とその郊外にあり、最終的な組み立てを県内の工場で終えて世界へと輸出するのです。

## 鳥取県の国際化の課題

このように国際的な分業体制、この鳥取県の地域経済も見えそうで見えないですが、実は海外と深く結び付いているのです。今はもうそんな時代であり、うまく活用しなければいけないのです。ただ、山あり谷ありで、この1年間もいろんな国家間の問題もあって、韓国と日本の交流は少し冬の時代を迎えていました。

米子—ソウル便も始まったころ 70%ぐらいあった搭乗率がガタッと減り始め、平成 19 年には 40%台になってしまいました。これはいかんかと思っているときに、それまで国が決めていた国際路線の設定方法を、航空会社が自由に決められる「フリースカイ構想」という手法に変わったのです。採算が合わなければどんどん切り捨てる可能性が強くなります。私たちは不安になって、東京のアシアナ航空の本部を訪問しましたが、そんなそぶりも無く安心していたんです。ところが突然、アシアナ航空の本部長さんが顔をしかめて来庁し、「実は、ソウルの本社で会議があり、米子—ソウル便は 10 月 26 日をもって運休することに決定しました。」とおっ

しゃるんです。同席していた県の職員は口をあぐり開けて、いすから落ちんばかり。しかも正式決定まで1週間しかない、というタイミングで万事休すといった状態でした。

そのとき私の脳裏を様々なことが巡りました。今や韓国も中国もロシアも大きく成長を遂げていて、今後も必ず伸びてくる。良きパートナーとして相互にメリットを受けられるような環境を保持する必要がある。また、飛行機に搭乗する客層を考えると、今、搭乗率が好調な路線は宮崎県や福島県。どこもゴルフ場とか温泉、スキーなどで伸びている。今年のゴールデンウィークに搭乗率が80%を超えた富山では、立山連峰の除雪した雪の壁の中を通るバスツアーが外国人に人気だったそうです。

振り返って山陰はどうか。山陰には立派なゴルフ場があります。しかも、大山と日本海が見渡せる景観の素晴らしさは他県に引けをとるものではありません。皆生、玉造、三朝という全国にも名の通った温泉もある。しかも大山は、恐らくソウルから一番近い日本のスキー場です。この山陰が宮崎とか福島と戦って負けるわけがない。また、ビジネスでも山陰の企業は世界に繋がっていて、この流れは変わらない。そこで私は、アジアナ航空の本部長さんに、「確かに搭乗率は一時的に落ちてはいるが、山陰には跳ね返すだけのポテンシャル（潜在能力）を持っている。また、搭乗者を増やす支援策をちょうど検討していたところでもある。もう一度チャンスを与えてほしい。」と言ったのです。

さらに、島根県の溝口知事、米子、境港、松江の市長、経済界の方々の協力を取り付け、その翌週にはソウルのアジアナ本社に行きました。アジアナ社からは、1億5,000万円ぐらいの赤字見通しで、民間企業としては非常に厳しいという説明でした。そこで私は、半年間、搭乗率70%を下回った部分を県が支援します、と提案し、何とか運休の保留を引き出すことができた

のです。思い切った提案でしたので、いろいろご意見もいただきました。県費を投入するのですからそれも当然でしょう。しかし、私も決意を持っていました。必ず日本と韓国の交流は盛んになるし、鳥取県にもプラスになる。一度ぐらい勝負を懸けることがあってもいいではないかと。かなり批判もありましたが、多くの方に理解していただけたと思います。

## 花ひらく交流

実はその時、アジアナ側から条件がありました。その一つが、江原道との交流を再開してほしいということでした。なかなか厄介なことではあったんですけども、私も知事就任後から何度となく金振煥知事にメッセージを託しましたし、県議会の皆さんも団結されて交流再開を求める決議を全会一致でされました。そのことがあって、米子で金振煥知事とお会いすることになりました。私は、今の東アジアの時代に日本海側は遅れをとっているが、お互いに交流を深めて共存共栄しようではないか。人の交流を育てて平和にも貢献しようではないか、と話すと、金振煥知事も同意してくださいました。そしてようやくその年12月に交流再開となったわけです。

これだけではありません。この4月に南部町のゴルフ倶楽部で韓国のゴルフトーナメントを日本で初めて開催しました。そのきっかけは、韓国でゴルフ場経営をされている会社の会長さんです。実はこの会長さんは別に高等学校も経営されていて、昨年、200人の生徒を鳥取県に連れてきたとき、琴浦町の日韓交流公園に立ち寄られました。削った碑文の文言を戻す戻さないで随分新聞種になったちょうどその時でしたが、生徒たちは本当に感動したそうです。会長さんは「これだけ韓国との交流を考えてくれる人たちがいた。ここには温かさがある。」と素直に喜ばれました。人間の心というのはそういう

ものですね。そして「大山のゴルフ場も素晴らしかった。ぜひ鳥取県を韓国に紹介したい。」ということからこのツアーが実現したんです。

さらに、地元の人たちが快くボランティアに協力してくださったと、ツアー閉会後にも大感激されました。完璧でなくても心のこもった通訳をしてくれたこと。沿道の交通整理とか、多くの地域の方々に支えられた大会ができて本当に嬉しかったそうです。ですから、会長さんから約 1,000 万円を鳥取県に寄付する申し出をいただきました。これほど国際交流が育っていて、心温まる交流もできているのです。

今では韓国からのお客さんも増えてきました。韓国では、テレビショッピングで海外旅行も紹介しているんです。そこで県内の温泉や食材を盛り込んだ少し高級なツアーを組んだところ、非常に評判が良い。インターネットでも「素晴らしかった」という書き込みがされて、夏まで販売が延長されるそうです。また、三朝温泉とゴルフ場がタイアップしたツアーも好調にスタートし、韓国だけでなく台湾や中国からも観光客が増えています。

今、私たちは環日本海時代をにらんで韓国江原道の東海とウラジオストクと境港と結ぶ航路ができないか一生懸命画策をしています。韓国のDVSクルーズフェリーという会社がチャレンジしているんですが、一説によると境港でなく下関かもしれないと言われていて、我々も今一生懸命誘致活動に専念していて、明日から、山陰の経済界が大挙してロシアに行って、経済事情を見たり沿海地方政府と交渉したりということになっています。

妻木晩田遺跡とか、加茂岩倉遺跡とか、北九州や山陰には大陸との交流が深かったことが伺える遺跡が多いですね。この地域は、かつては日本の中心だったんです。なぜか。大陸に近いからです。今、再び物流の時代に戻ってきました。この環日本海の時代は、太平洋の横浜だと

か神戸に行くよりも、境港から運んだほうがはるかに近いんです。我々は今まで「裏日本」と言われていましたが、環日本海時代の潮流をしっかりとこの手にすることができれば、こちらが今度は「表日本」になる番です。ぜひそれを皆さんと一緒に作り上げていきたい。そのためには韓国、中国、ロシアの皆さんと心のこもった交流をして信頼関係をつくること、あるいは経済やビジネスのチャンスに向けて皆さんにもぜひチャレンジしていただくことが必要だと思います。それが、私たちの次やそのまた次の世代の反映、豊かさへとつながっていくのです。